蕗原拾葉

四十
四十一

内閣文庫
和書
二九五六八
号
五三
冊
一七四
函
一九
架

内閣文庫
番號 和 29568
冊數 23 (12)
函號 174 228

蕗京拾葉

第一

校

国立公文書館
National Archives of Japan

蕗原拾葉卷之四十

信濃　中邨元恒編
男　元起校
泉　舊富撰

内一〇七九七號

美濃州坂越記　木曽

國造本紀

三野前國造

九代春日率川朝　開化　皇子彦坐王子八瓜命定賜國造

御國國造

十三代志賀高穴穂朝　成務　御代物部連神出雲大臣命孫[illegible]大良命定賜國造

記曰

日子坐王子神大根王神大根王亦名八瓜入日子王三野國不巢國造之祖　和名抄不巢郡　[illegible]

職原大全曰武曰此國有大神三故曰三狹ト後改賀茂大神
代卷ニ曰美濃國藍見川ニ上ル
本名風土記有大狹三説畢竟ト符合ス此國名所例ニ
ヨリ大狹の名坂ニ成ル國名ハ勿論名所ノ
数多シ入日三狹名坂欲成國ト云シ時の号ニ日本新名ニ
三野ト云ヒ此國廣狹三所ヨリ名稱所出所ニ廣
所ヨリ拓殖開拓百姓の英雄成業ヲ成リ而事の莫成
業ヲ成ル也ヨリ
和名抄國府在不破郡ニ行程上二日下一日管八郡戸八百二十三町六十五歩正公名三十万束ヲ稲八十万束
雜稲二十万束
多藝多伎 石津伊之津 安八池田伊久太 大野阿賀係 本巣巣
左止須 廣田左之加太 厚見阿加美 不破國府名勢加々美 山縣夜ま加た 那上
加茂 可児 土岐 恵那 武儀 多芸
美濃路
格紹 本多川の西 古字留馬
後拾遺歌歌
源重之東の道ゆくきるにうたはゆいふ如みち
東路ヨリ出ル海ヲ海ヲハ行ふ人のなきハ動ク
武ふヨリ東ハ本多川ヲ渡ル人の名ハ動ク
上ヨリハ大田の城ヲ出ル川ヲ渡ル
大田宿加茂郡 和名抄曰加茂郡宿の西ニ賀茂神社
ヨリ或曰東ハ本曽川ヲ渡ル大田渡ヲ
今渡邨可児郡大田渡ヲ此邨ニ上ル和名抄曰可児郡
旦理郡ハ此所ヨリ東ニ古渡ヲ云ふ如見ヨリ本曽川流ル

あらうく和場雲し在今陵と云ふ案山城と表記為宮長
可氏ふ云ふ古にく古田の陵りなる名と云ふ附屋之
為久紀ふ田賀伝説軍勢陵りなく戦ひし大井陵と云ふと古陵
なり大井死所を在大井の陵と云ふ此所陵より十町宮川上
道の西の方松林の間ふ土壇多く在るハ宮殿の跡と
いふ又た苔殿の物の跡なりとも云ふ北道西に平野社と
云ふは牧場の跡なりなるべし

宿次

志田今陵　伊勢　井尾　志摩　日吉　安東　答戸
竹折　大井　千里林　弱場　中川　長尾陽　陽原　伊坂　関東
和名抄ふ可賀かゆと云ふ今ふ西のかにと云て宮ゆの宮殿上の
誤ふ業耕の誤なるべし

神宮宿　大寺　薬師堂　竹原　小橋陵　一本
井尾邸　可賀川の小ふ　細谷川流を衛尾小橋陵　一本
橋なり　和泉武紀乃陵なり　里俗小武橋　或所の跡なり
物ふ云ふ陵なるべ弱場或所なるべ云ふと海原
里の説　陵静なる云ふ　いふと美濃の国のと風
武日和泉武紀賀徳ふ来る多陵なり　此所を和泉武の国
見なるべく　併屋ふ　一説ふ北陵と代を　橋の大小なり
今を柱打しく後又橋物柱毎り和泉の橋場と云ふと
陵なるべ　牛歌の移人連歌の句ふ　和泉武紀の跡ふ陵ふ
追分　東の方を古を小の方を今屋なり
宿村　和名抄曰可賀郡可賀郷可賀郷
かに川と云ふ　此を土田宿の南殘流を本宮川へ為る

志月郷　良の方險山巖窟あり鬼の窟と云中古関此
を市と云古昔柏原の国柏て村民城猫せり神岳宿の首古柏
木祭の時小竹を殺し首城郷の西中村あり是を城ヶ窟中
に柏家の跡を称す弱を
茶屋　志月より一里原家五六軒あり大屋の跡を大に張り
不と云
一古松　此五尼寺の跡石塔五輪あり老尼五人ありて食銀多後
城跡を検歌とす
　　歌
　　ちとせ経ぬ夕かくやくれの年に古ふるこ茶久世なり
書掛　茶屋坂　古来多年なり此不日吉村の切て石地迫村
里俗曰昔猫迫沢五柏原の西郷なり人西皆此郷風
土記多之八坂芦と曰田根陣屋とあり今此家郷四の秘

俗多く鬼城窟と称す八重和の西窟とて白窟なり矢原城
降て柏原の里に移り城郷の出て城柏を
古る鬼城迫を尼城と云西原郷
来て西原八大井郷の北方にて
郷名の古村の南出る原迫郷
酒の品の田へ下り鶴の原也故に田城
と云柏城八重村の樓と云此柏原
今三年目なると水[illegible]白郷日吉の今当村とて
郷鉄なるにや郷る他に猫来て大に羽に絡て西物と云ハ
酒造の民家あり糟屋水城跡て
云郷なり大引て此所に歩行[illegible]糟屋別大宮と
家行て鬼の窟の跡の茶屋あり城郷と云又茶屋村土塗村

あり大阪冬の陣に遠征奉行の命を受け遠く西平坂の
雜器八卷四二番院の神門信州の産人神主を不考証
奥書九と称せり 御書紙神鼎乾坤紀朝より命せられしに
政頼御爵まうけ給ふ所神平なりなく急使捷せて
孫左衛門より奥の急使 徹夜あり神平湖を所報の報
しかひる物語文の名人と聞くと云後より遠人城守上
の世にしとりふと笑ふとなり
和田根陣御四二氏と信濃国代御と吉田氏の
比あり給るにや世代陣あり給ふ
先祖より根津嘉平と云人吉と云代を過ぎなりと不
日吉本郷 葉方に能登守宮内 社堂より桂井八月 月の祭る人
塩湖西とと云所より二十丁 御坪方 日吉と並の

郷あり北郷の南より月の宮 月の休と水月の井と云ふ迎
月の珠と云ふ産物なり宮殿 ほとり貝の山さきなくそり
十二卷あり水月の如く遠と称する内に新者と上下共
光彩極上の物と称あり 外大小数点皆用数
なり 敬持 は多賞の紙紙 光と不識より異物なり
里傳の歌に
夜さの嬰紙 言に好明月 月吉ら吉里紙なり 西行
関あり八二掛あり そよと毎 ぬる人より月吉の 夜明
器あり 宮の内の 産 と云紙陳 月吉 日
抑 より 後乃面 新より 神世 月 日
むと 明人 光 あり 玉 の 代 陳 月の井の

西八幡宮川より北よりの石島居ありて村中の宗社
社領源之位頼政建立なり代々土侯氏修造し御朱印
男山より比しく華麗の鎮座の古社なり
宿の郷（可児郡より移こなて二里半）和名抄日日吉郷あり
市神社 市場あり しく商賈多し 知あり
天道日 霊亀元年歌の良の方なりと毘日吉の名不あり月
吉に対せる名と紀実に日霊此和より陰陽々霊験有
り代々祭事多しと 恵日山慈照寺（古八天台宗 今八曹洞宗）
いま代城と云ふ多けのいのみ有所者の坊ありと云
中原村 和名抄日 和原歌あり 古墳あり 通追田百
四十町四とりあり 面積あり 倉戸村より
倉戸村 宿（ヒトツヤ） 川和日吉村境あり 倉戸所より北所和

古の餘戸歌あり
槙皮田 古々大樹あり川の南岸の石和 日吉村竹折
村へ行あり不審陳尾張街道へ行あり 時稲 流れ 土岐
村へ行なり 里傳の歌
伊勢つのの山のみのとを比倉戸山茶屋 さと茶あり
さと茶屋々々 紫焼倉戸 山茶屋 石臼 陶器あり 歌政
竹折 恵那郡させる古墳 大石の石の肌 長田村
西家村への石ばり 東の方 岩郷の城 通路あり 小の方々
ろろの街道なり
牧岑（マキカナ） 北へ東々大井宿 和名抄 東山道の歌
路あり 南方々下街道 尾張伊勢へ行道
大湫宿 夢長九年 元命より北へ北歌建

細淵箱　慶長十五年　比箱迄　伊嶽　細淵右箱の内星印を
[illegible]
大井箱　恵那郡　和名抄可児郡大井郷　因と可児土岐
恵那三郡に村里人家多く居住の
三代実録仁明天皇嘉和五年　従五位下恵那郡司人任俊郡
司暗殺　是以大井駅家人馬若干廃官舎類朴因若板木駅子
悉逃諸史擁塞　云云
武益大權現　大已貴命
大井箱の東野村西家村中野村長田村迄不法邑宮社とす
岩邨撤去　遠山某鎌倉三代将軍を合祭し武之社とす
建保元年　和田合戦の後を浦　畠山氏族当を社務とし
[illegible]　一鵬より十二鵬よりある　神頭一万石を云　[illegible]
樹木

を[illegible]　天正十年の[illegible]　[illegible]社田社僧廃
廃舎の古蹟のこと
神宮寺　和地堂七宝塔の石証宝　[illegible]の古蹟知の[illegible]
[illegible]
濃州恵那郡遠山庄大井郷正家邸武益天權現宝前
天文七年棟札
永禄七年社僧建立遠山景任
天正初年遠山氏の府中より岩村と同く繁昌の地
[illegible]
[illegible]
千弦林　又千弦返　此木従前の板本[illegible]下り四周多く平地廃地

記あり

坂本茶屋　茶屋二軒ありて西十年を経て町家を続て駅居なり
と也　本多家記兼山記曰天正十年七月兼山嫡子藤武義守
長可信州川中島　松代なり　より兼山へ本多政を以て本多政
成留首木城を責山名陽女政を伴日福島駅を攻ず不討ハ
多駅林の宿あり討角しとおびただしき
城岩村の東山にあり和田紀の居なれば弾を別当の南国衆ハ
城の内中人四畑小なりとて別て乃坂の古址なり岩山氏繁昌の
美濃山城五男山の高麗を推し結構美の壮麗なりしを
天正二年阿寺城の時小坊舎焼亡ありて弾を
社僧逃亡し殿舎破壊して今に社一宇残るなり
神名帳美濃国恵那郡三座の内坂本弾正を社祭る

駅内に坂本とあり如弾正なく中駅の社と見て也
類聚三代格曰美濃国恵那郡坂本駅与信濃国阿智駅相去七
十四里雲山峯を経て遠坂高峯昼夜飛脚到る
或曰七十四日八往還の里程なるべしと　和曰七十四里を
今見るに十二里十二町なり所在を云ふ人居の在
祇園社　駅を駅宿を人居なるを小和にて云ふに
駅下稲八里ほどの旅人の宿なり遠近なるを祇
園に七十里なるべし孫子なる事の駅八
多駅林の駅し阿智駅を伊那郡弱陽駅を供しなる
名蹟なれば也　三代格延喜式の文脱別条奉之
言
千駅出ずして中津川一宇中津川より長谷一宇長谷より

湯本郷と一里湯本郷分 西は山嶺を里中山嶺より弱陽
と二里余
上弱湯村下弱湯村 古之坂本紙の多残る所あるべし
阿智駅も弱湯と
りの如しかり
今上郷 弱湯村の南山より出る谷あり広原の北方にて大古
の石節 阿智郷の駅址 通路の節あり 和田和名抄曰恵那郡
の上郷おりんの
木川 南巽方恵那岳より流出る川あり宿の南城下
和の方木曽川に流れ入る
今下郷 上郷の下 二ツ所少しの傾なり宿の東の方農部分なり
此所に廣原の地あり古を去の廣原なりしか山接り相地
なり故に如し言下なり所に屋敷の古跡多し篠木宮或ハ

寺院の古墳乃信も所り竹林世古を経過の地なり此
只西色年数の木なり能乃紙幡もし寺の築山を立る
和田和名抄恵那郡鈴下郷おりんの
今上郷の坪方 舎人も良方そ
正中流 流れ中津川に合する
名今上郷下京南を異古る弱湯の
白山大権現 社壇東向中津川より少方に表所り中を白山
乃を然社 水を富士相殿乃を社家の因城大門家に表西を
一の宮社 正を方にて稲所り然社井 清水 然社如来形
田畑の為り所り 祭礼畑寺 畑北五尾寺書 寺の茶因畑の石
みなり
大正寺 表日の西 五輪 岩 表の地城新生 少所り小宮 表の
別当 弱湯の右 社僧 表し 法を 社僧の右 表ト見西

一尺五寸余

古墳の名少和名抄に所載の郡の北の方の相
殿郡にて五十年ほど社壇結構荒廃人の営建なく殿舎
丈数多年を経しかば社家社僧の協議にて天正二年早速修繕
東西流豊後守宮内卿長吉より寄附の田畑の内にて修繕の
費に当り和田惠那郡の内小中川と称し神戸帳の惠奈郡三郷の内乃
中川神社と称する由

八幡宮（中村中津川岩の地流れ）と称する四宇古墳あり是は阿寺城と称
する所なる羅城門なり白山八幡宮社城中津川中村の産社也
神社大沢氏

惠奈山　山麓陸奥守信成公の城郭岩屋八幡
川上に所在惠那郡中家社と称する村氏ヲタケサマトリ小川上村ヲ
（カウレトニウレトハウヘトニ訛ニテ和名抄に記載なし）神社に列当社僧も多かりしか

古墳山氏勝俗の場所壊敗せしと山の上山下岩木社有て無
年九月十日登山して祭祀せり里宮より三里弥を小木氏
今も高宗と改称宜城跡城女巫寺屋敷の古跡里宮乃
近所なり

阿寺城　城下の名称村（阿寺明照手賀野照根ナラン）
此城を東小八中川の上険阻なる川際なる乾の方に雷原乱
と称し険山なり八里羅く弱々なる狭来の城山に住居なり
村々の通路なし　城郭全備
知れず南を言山なる岩村の枝
中仙位押元の要害なり岩村の枝
地なり下なる村に流れ雷原の内に所屋の古跡多く有り家
中屋敷多なりしと称して天正二年三月武田勝頼英陸発向
の時木曽義昌なる郡より出陣（勝頼を伊那通りなりて中務卿長倉
上村今考に智城を攻）

徳城城一日の内に攻落しく城を焼て出羽
苫木城を焼山久保城を攻落
伊口義昌和人を夜に入て
を落し和泉の軍を攻て次矢城攻て
しと呼て進て城下城焼城を開章しく防て
敗北をと云
徳の城中川崎 東山阿寺城の山続き狼煙山猿山場
山上八五百口方 稲の平地なり
城中川の東八幡森の麓の方にて小高き所あり阿寺城攻の
時義昌の本陣なり
義合崎 矢波路長坂の下本宮路十郷路の下伊那路路
の下二方より義合の坂より義合の坂より

御所 本伊義光 国衡義合太郎 兼行住居の跡なりと云
兼平の中 西行の生れ給ふ所
城趾 宿の東方 釜淵の南方 小栗川崎の 陰山場
かくれたる 西宮堂国の地なり 伊那路木曽路捍の好山なり
の技場 山民築なる
湯の沢村 恵那山の坂良なり 流れ出る和田の東の谷
盤石なり 流れ出る和田の東の谷
皆撰 街道の東 徳古御坂越の時茶店なり 今農家三軒
あり 問屋二軒 街道の西なり 庄屋なり是なり
御坂越 藤原秀衡 藤原秀衡の居なり
渡合 南方八幡川 北方八幡大川 の合なり 恵那山の良湯の沢村の巽
方なり 谷間を流れる川 又藤原の東の坂なり 流

出る川ハ清き川といふ荒村の南方より流出ハ千の温よ良
水方より加る川を冷寒といへハ清き川といふ國俗寒氣つよく
とりかる諸きを峰にあるよし也
猿か住家ニ於て或日見る所東好の猿ありて東好猿猴
と好か申す猿猴猿をなると訛るらんと見ゆる處し東好猿猴
日蹄駐遂の時 菓を求る木曾路の方へたちん隨行を望みたるに
あとひ見るに木曾の麻衣ほそく染るへき神の色ニハ
と讀るを猿おく木曾の御嶽の頂きより落ちた道山のみなかみ
川のきゝわ紀るまゝ如くとなりて落るゝ志て待ちし
猿かまれ共の高山深き谷の足すていひしく數多の人猿共
しく驚き猿のさる母の淺ましく悲しきまゝは
さらめも海くらき世なり象宗あらる あらひし清の山里ハ

と詠しまて名残も出るると有 私曰國守ある岩村の苗木の
城をたるらん
花何陽 霧泉の良清き川の水源なり 今ハ大宮積りたる見えまかくされたる
道つと人見えあれ共見えさりける所に嶮しく坂あれハ送る
又時にる人見えてる其後へより園原方の花何陽よりこれハ
園原かる出てく阿智神社を附送りしるしとありん
私曰今も信濃路諏訪岩と私曰とのる所の大沢なる 私曰信濃岩名
の名ある丘也名をも積ませハ沢の名ある所の茶屋人見花の跡
見る 持送ひ茶屋より馬に積く送るハ此様なり
御坂深山深霧の裏あらく深長幽寺の坂かる也中に桜ふ御霧
の清く深く白くあらく 字書曰天子所止曰御前御書御服といふの
清の白きなく歩上世文学吟味の時清霧とあるめしあるならん

山田坂日本武尊越ゆるをは伊の字ばかり天王坂乃下
畧ありしとぞいひつたへ
峠茶屋 西のかたは美濃国那郡 東のかたは信濃国伊那郡 石坂屋敷の地形の古跡なり 此茶屋
なく呼をは荷附場へ多ばかりなりといふ
續古今集 吹のかぜ木葉の山坂の谷風も拾ふ秋ぞ哀なる 鴨長明
新古今集 谷風よ雲をの乃を信濃路や本葉の山坂の文立の苔 千恵法師
續後撰 信濃路や木葉の山坂の小笹原ふり捨て神さびわたる哀なるかな 摂中納言長方
夫木集 信濃なる夢路荒れはうるかなく木葉の山坂八百重ふりぬる
為義朝臣三河守なりし下りなるに すの国さとしの海に初めて
信濃の高嶺の雪見やりて濃信なりし国
白雲の上なる雪の山の根や月夜なりし国 仏国法師
こゝは本国信山嶽なり哭んん湯ゆ泉坂を他国なる雪ふ

山なりなる坂

霧原 湯沢澤村乃巽の方一里余の原なり屋敷の古蹟数多
なる国 園原 吉法寺余数なり富なるの共信なる霧原なる長者
霧原なる東の長者といひしなる地元文年間殘鹿協出八貴文
なり 元豊通寶 元祐通寶 和洞制物 和漢の古殘の内屋殘多し
近年とも武具家賊城なりなるとなる軌を八帰板しなる
茶磨なりなる拾せなる乃薬磨にして用中
丸山嶽 霧原巽の渇なり土砂殘以く築立なる山なり平原
の北なるを八幡なの為ふ築紀なるなん原乾の方に切岩敵合
なるも地迹なり木なる路英波路伊那路三方殘諸国なる地方協
要害なる国の地なる原の東を伊那嶽（はぐき）なる山なり南を
恵那岳一なるを原の南なり 為なる川の流なり乾なり

長方まゝ　博多川の流三方に谷川多く　宗像切岸とも二十
間三十間程の屏風成立る　峯合塚　徳塚　阿弥陀塚　弘林塚　荷子川塚　大井塚　西宮塚　狭く
岐塚　野井塚　北十塚　岩村の内　塚多く　街乃押の岩石
切塚への地境多く　近く天街乃の東　串に持たる如
一勝の地形多く　是山氏繁昌の名　法隆寺とも
　　社日十城の内　霧原阿弥の面影　切塚　小野八幡
　　検塚　多く　番　士成寺　出る　仏像　城　竜　乃
　　地形多く

霧原　奥伝法　國原の数多　同名多　原多

多賀ち月　先　多　木の如き　霧原　弱
北成湯　永　多　は　奥　好　と　伝　多　阿智乃

一　多　市坂越の辺　多く　清　云
拾遺　逢坂の関の石如く　踏　山　高　出　霧原　性　弱　大鼠　多　之
新後古今　夕　賀　八　多　先　世　多　木の如き　霧原乃　弱　義明
後拾遺　坂の清　多　関　新　坂　実　坂　風　有　霧原の　弱　正三位　架泉
長者松　国原方へ下る　右の方　地　古乃　八　大　七　田
かゝ乃

第の森　街道の東の傍　第の如
揚枝屋敷　街乃の右の方へ　茶店　屋並　六七軒の　地形
乃　児の揚枝　倒れ枝　付　木　十四年　古　多　乃
多　坂　切　今　根株　常の揚　屋敷　一面
乃

木賊山　街乃の北　原少　市坂　赤　八　東の　山　月

下みなもの

荷沼場　筑紫の国薬師の郷なり

筑紫　市板清弥太郎、伊那郡伊賀荘より農家二十軒余り有り長者屋敷の古址なり傳曰金賀吉治信高といふ者炭焼兼治といふ者の子にて京家の婦女弐留降て妻となり子あり吉治といふ幼時妻金弐を兼治曰吉治炭焼業多くなりて遠く出て帰り吉治を生む吉治長じて浅弐買更に持ちて金弐買又京へ上りて浅弐買更易して富有の家となり つの孫京長者と云て正乃隆信といふ義弟に佐藤兵衛尉を行る吉治信高長子といふ今に色々の物弐出土いろり山徳の社 權多殿といふ者黄金佛弐降り堂弐建てあり

權多殿薬師といふ長者屋敷なり毎夜鶏鳴の音聞ること（これ今に有るごとし）の傳の湯母堂霧京なり迎年を毎歩出の光明のごとくなり湯母堂霧京より人家出来て大坂の人の掘家（それ黄金の精なりとなり）を年京より人家出来て大坂の人の掘家となるなり

名寄

本蔵荆の京山の木のるうこと出る秋の夜の月　仲正

新古今

立るうこと者を咲めその家和仏屋といふを世に出るなり　藤原俊成

日

拾遺

東海の方の京うハきこ出ることハ朝ーとなり　相模

古今

思ふ恋ーこのハ古海の仏屋といふ世に拾遺西　読人知

山田市木者の仏屋風俗ことなり　詠歌あり

天不集

山田市木者の仏屋の宮神田屋神なり秋のもとなり　衣笠内大臣

仏屋三代実録仁明帝諸国建布施屋袖中抄曰陽成院朝なり

世々廃なりや越後国国分寺の尼法光志賀なり越後国古

志郡 波戸 瀬建布施屋 是往来之旅人を宿し恤之と
いふ 御坂 所但なる所々に寄掛 低く作りたる屋なれハ伏屋と
いふとぞ 諸国の所々にもあまた有りけるなれども専ら
此所に読り

帚木 檜 椹 栂 等の常盤なる木の枝横に延高木の枝小
なるなく 清水あるものなく 此帚木のやうなる木は御坂山に多く
園原より見えて近づけバ此所に讃ふや 此木遠方よりハ見へて
近く入りて尋ぬれハ見へず といふ大山の清水生茂る中なれバ
枝葉の重なりて見ゆる ありとハ見えてきえぬるならん 此帚木といふもの
帚なれバ 又帚木とハ 蘰室をいふと 古哥の類ひハ此所によめり
とぞ 蘰室のあやなる処や 但し伏屋の生えるハ伏屋より見へる
すその森の繁 或曰 古説に正月初子の日 机枝を著けてきたる

蘰室伏掛ふ是帚木といふ 帚木ハ玉帚 箒似也

新古今 その原や伏屋におふる帚木のありとハ見えて逢はぬ君かな 坂上是則

全書 はゝき木の心をしらでそのはらの道にあやなくまどひぬるかな 師堅

源氏 数ならぬ伏屋におふる名のうさにあるにもあらで消ゆる帚木

何となく見えし新しく見えし帚木

新拾遺 旅人もいとゞ手招く闇しきものは来てとハ見えし 室の下陰 道遥院

新続 山路の伏屋の宿り苦しくも忍ぶ思ひ田子の浦行 日

古今 遠くハ偲ぶ雲ハその原にありとも知らぬも見えぬ帚木 師兼

家集 その原の山路いくつのとかく何木 君も枝此もさかりと遠けり 冷泉為人

蒜噛邨 御坂の古名 園原の艮方也 日本尊御坂筋比村より
蒜噛上り 坂御坂越せる者 此所にて蒜噛くと先見るより
名となるとぞ 今ハ茶屋の園原街道を比村の南の方越通る七八九十郎

今宮非文蛭神とかく

阿智神社 蒜咲村阿智川の上 神名帳信濃國伊奈郡阿智神社

是やはり天思兼命 今も山王權現といふ殿舍の古跡多し 弘

治二年 武田晴信乱入之時社主社家敵退ヒし中ハ別當寺

逃亡し 神社廢壊ス 所當家なく由緒伝尋ル

非領の所米ハ残福り蛭神村王寺領寺ハ東氏

阿智川 市坂より流出る 初るハ村の南神流

東の方へ乗川入る

小野川 市坂の巽方波合山より流出る 是東の下伝国へ

かゝ村の南なく阿智川一ツ流る

小野川関 弘治二年 市坂越改の為武田晴信之手五十年

東照宮甲府なく 下知なく 永伊奈郡阿鳥初久氏寺之

波合峯 是峯東より巽方ハ 市坂越の路ハ阿智弘治二年

武田晴信之頃 波合領和田之義濃参河尾張遠江

通路の街道なり 慶長五年より阿智領 知久氏守之

阿智郷 信濃伊奈郡 伊那良荘関の内 今も弱福村ハ

阿智川ハ福の南方 伝流る南方ハ三河国境尾張出る御乃

峯ハ地非つ峯東へ出る 市坂越の吉乃郡なり 弱場上町ハ

阿智川の峯なり下町ハ二町余良の方へ行 平地なり

阿智関 弱場宿上町下町の間に坂有り 石垣南ハ阿智川乃

切峯多く 左乾の方ハ 波伊なる巖壁也 坂伝上ハ東地

なく下町へ 此所ハ関所 此所ハ下町ハ東戸脇美田 西ハ美田なり

田畑家の所ハ 高ク 傾ク

信濃路ハ此所ハ 石ハ 知家

阿智村おのづから濃州に
関の郷三十六ヶ村なり　上関中関弱場八ヶ所の郷といふ所なり
二年　武田陸信伊奈郡に乱入し　参河美濃押の為南方
波合村より奥に立市場越の押となる　是奈の下奥建なり
なり　今此川の奥長なり　此時阿智の奥に侵入る
なり　敗壊しなるの所の男ども信玄陸合へ出押りしと云
傳曰鎌倉将軍九代のうち西国へ出仕の大小名東海道筋
関法師なり　市場に住く　伊奈路に住又ハ木曽の街道に住
何も武家に成り　甲斐国へ入国なり　石の宮へ引越村
に住む　富士山の麓の根方に住む　市場へ移る是に世を隠余
御所なり　今も石村に住く　街道なり　天正二年三月　木曽義昌
武田信勝の内なり　東奥に農民の内なり　諸侯の乱後し

人多に成通ふ　木多に成通る者多く　市場に成る者減し　是にや
陽の御村　是原村弱場石の内　十石の御領なり　彼是と紀陸の
実を伝る　寛永の時なり　村の者ども伊奈に成通る　今も
法木生ず　通路なり　乃ち乱なり　乃ち所なり通る者も所り
場の御　手林　阿智駅　弱場　市場に成る　乃ち元六里余西
の方　実御附の事
七曲湯　伊奈郡　駒場　社山村の中に　ナメクリトイフ処有湯永
澤といふ　弱場石より二里に近し
後拾遺　陸奥八セの恋の源氏物語に出る古屋なり　出陽東ん　相模
張川百首　いうの日ハ七曲の陽のうくこの古に出るいつも流しうるん　基俊
奈路橋　七曲に湯川より十四町行く　奈村といふ処所　細谷川
の掛る土橋なり　伊奈古道筋なり　今の所を西方共ハ東の方

みち（中略）長谷川の傍より下り道といふ三筋の中なり
（拾遺）切き木を中出すむと笑のきハ茶屋の傍をこえ行 後会和
（哥枕）石蓋し様なるの孫くしかるの様くの嵐なるなり 日
根山（下野国二里）伊賀良の在山村村古乃第寺あり二ツ有山なり 此山
の多様通る一對の山みく立多下大小あり風の方かし 俗ニ婚姻の
者ハ此山ハ必離縁なること 此乃様通ハ必離縁なること 乃ち
而孫知るべし
（大本）是なれの事知るべきと人様根の山の通ひ 西定
光寺なるいなを根の山なんなる名れるひよ重なること
ときてあるなんの名なれ白雲のいふみの山より嵐なる 抜うえ
此根の山より一里様孫く阪田城なるよ 古乃ちこえ様川傍通る
松尾御跡 ちくハ下野孫より通る 西の方ハ乃道
城の方を古乃名助なるを庄光寺村なるこ様川の西川傍古乃みく名
光寺 業木の像清白のあるく（業寺下り） 業木寺 名古の伊那街乃なり 阪田
城のあるる風越山なり（寺松の風越山一里余西方の高山なり） 山なり街なり
義濃下街道 土岐尾張へ出る往古ちの乃なるを 和名抄曰 鶴家
鶴城古跡 宿の乾の方なり 傳頼政 葉之 頼政 弟 と知乃
なるし 或説多田満仲七世の裔光衡 始く土岐氏と 孫に
頼隆 頼負 豊 なり 此孫 佐 く 天文の比と 春山氏と 均く
威様振 ちう
一孫 篠竹 城の乾の方 以 高辺の 数矢の 嵐 一對 つく 生立 多加 一鎌 て
一双様切 なるなる 孫 三位 此 葉竹 なる 三十六生の 嵩の 相 みく 刻
多 年様 以く 化多様 材 多 と 後神嵐 と 改む 今ハ土 岐 と
カウの 其 一 西様 南 石 なる 良 等の 稙野 平 ちう 孫 多 く と く 稙 地 を

以て氏とする者多し（若狭 壮後）庄屋紙揚りすると平家物語に
所出とて兵法ものかし一瀬双竹の子実を抵るもとと化る紙
は蕪井ふ山等の羽紙利くに対するるハ俗書なるに
無拝者の古址（土佐藩の儒者の系図下に十四代）石碑曰前伯州大守定林寺殿
雲石存公暦應二年乙卯二月廿三日逝去
吳味（土佐仕古ちの尾張へ出る御乃）和名抄小野家と今田治見と云元徳九年
土佐牧負治見国長　帝の遺詔残まく田治見と称地名
池田吳見の須ゆく仕古ちの尾張へ出る御乃和名抄日池田家と
土佐吳味池田三郎大古ちの御乃るく日本武尊墾田所国の
乃筋ゆく今を下御乃ちく伊勢国宮の乃るれハ東山の知乃ゲハ
ゆきちく

木曽川西古道

赤坂（不破郡）国衙
谷汲（二里）岐阜（三里）見（二里）関（一里半）川遥（一里）小山（一里半）細目（一里余）
久田見（三里）福地（一里）中方（三里）蛭川（一里）高山（一里）福岡（一里）坂下（一里）
田立（三里 神殿日 歌枕）神殿
赤坂 谷汲 岐阜 苅見（和名抄苅見郷家）
関（武蔵郡）和名抄曰菅田八北面るく傳曰古菅田の里 今ハキツタヒ
源義家陸奥山徒征伐の坂 残黨推守の通ちく 可不の九山と
りふ処ち名称據元関独立ち守将ゆち淡路氏山田氏弾正と
（は近里尚陶道の氏の多ゆし後裔へちふ）菅田村紙いるるく関と呼来ちちる尚しちと
岐阜川の末河渡ゆ関有ちとと平田紙知ら氏
私曰美濃国街ハ赤坂ち所ハ国守東夷復仇の雅と計く
木多機乃筋ゆち菅田ち吳味ち所入高山乃西坂越ゆハ

河流ゆえ城郭なし
時なり
川邊　且理　呉田　小山　呉服村　和名抄曰呉家と川辺村の流と
古井村　竹ノ古市　河辺村の内なり　この辺淀川　木津川の合流
二里余ゆえ辺淀川の流場なり　川辺村　古井村の堺なり
不可流　しかれども田畑多ゆえ　水合ひ際
高き　紀小山源の豪士　新左衛門と云者なり　砦合戦
切殺し　敗走　新左衛門　河辺の芝字城藤　呉東乃
砦　蜂の怒急　敗走　社城建　栗栖不
動　家敬　此所の城　城前　ふかと名なり
川なる不動の社なり　新左衛門　呉服の古跡　小山
の内なり　源氏　長小　敗走　源為義の色　源為義　河辺村　鴨村

の名将門の獄獄石なり　詳ひ　栗栖城　此所城　この
伊賀路の住　越　ハ　ハ　ハ不通　通　
墓　義仲の妻　巴　巴　田住し　栗津戦　此所
義仲の義仲の戦　城　遠義　上
記　の不詳
細目村　久田見村　福地村
中方村　蛭川村
蛭川村牛頭天皇　傳曰宮殿未社数多く大社　和名抄
況　屋上の坊下の坊　古跡
内裏　住吉宮　天川　生駒山
傳曰　後醍醐帝皇子住　天和金堂の祈願　勅諸
生駒山　住　内裏　住吉宮の古跡　跡

とゝ久かゝ者を田陶家吳々も多く協也と云
福岡村牛頭天王村中の塚社蒼光年中六日十四日荒田茅久
しゝ古所ゝ産年ふ杉苗七本曾不思議ゝゝゝゝゝゝ
家童口をゝ曰吾八津島牛頭天王也ゝ日和ゝ信ん と切ふ所
杉苗ゝ植ゝ泥ゝゝゝゝ因ゝ杉苗ゝ植ゝ教し
社ゝ建ゝ郡天王ゝ号ゝ崇ゝ其ゝ植苗ゝ云 分社ゝ上苗不
とふ

廣恵寺城　寺山険阻の地ゝ小ゝ花保口和ゝ川ゝ堰ゝて
美濃口東ゝ木曾口三方ゝ押ゝ築ゝ要害ゝ因の協ゝ
南方ゝ山石村ゝ面ゝ木曾川ゝ流ゝ八阿寺協ゝ也ゝ協南の
平地ゝ土塁築ゝ上ゝ要ゝ協ゝ乗拾の所ゝ村
中ゝ四方協の名ゝ四ゝ所ゝ家元永ゝ元亨寅武

年間寺山加賀守家長ゝ云ふ人協ゝ寺山氏の初家 岩村協ゝ居り 山景
長の人一雲入乃ゝ嘉協ゝ築ゝ 杉苗 作 後ゝ家長遷て
北協ゝ長ゝ住ゝ
岩村協ゝ始治家康 初ゝ築ゝ子孫所の新ゝ数ゝ母ゝ
凝ゝれ ゝ八幡宮ゝ勧ゝ家ゝ植ゝ作ゝ
ゝ付 社ゝ建ゝ陰ゝ十ゝ 霧協ゝ作ゝ
四方倒ゝ ゝ嘉ゝ霧協ゝ植苗木の旧ゝ因ゝ
協下ゝ苗木ゝ苗木協ゝ岩村協ゝ寺山ゝ正家
寺山ゝ道作正廉 宗八織田信正 太信秀ゝ女 花保関田秀房ゝ来 萩原協ゝ
三本二郎ゝ ゝ威徳寺ゝ合戦 威徳寺ゝ焼ゝ 利と
修ゝ祀別 仏ゝ焼 保陳ゝ ゝ矢疵 愚ゝ ゝ遂ゝ
因ゝ来久ゝ孫友忠家ゝ ゝ十年 因ゝ兼山協ゝ

長可苗木城攻（黒瀬久田見極川の川を城之方忠戦敗）
北之宮治家を以て長可方方義昌行の家臣
なる紀伊守の具林の嵩ゆく討ん上る国く背景城数名
〻〻為体さて慶長五年石城四孫四郎久之廃亡
登〻〻平切り国〻知行城歩抜
廣恵寺跡（西南の谷口ゆく）家忠国師の弟子　山和尚の元山
本尊観音観應元年　小春十七日　金書　抜化
板下村　神社仏閣古跡多し　村廃恵寺の跡すり良方な
き八幡願応天台宗ゆく八幡又二社ゆく殿舎と古跡
多〻　禅刹浄土宗大地ゆくるとなん傳説城史を見
皆古山氏盤居の家の営建なりといふ
因立郷　木方ゆく城　木方ゆく義濃元弾　押の為る様ゆる嵩ゆ

坪川と云谷川源さゆる〻
沼田（市坂村の内ゆく宿の西ゆ南ゆ）　白山宮　木方ゆく元元の節ゆ基勧請といふ
嶮山の巌崖ゆ結界の古跡ゆ別当ゆ天正年中迄ゆ
又掃石塔
晴明岩　安倍晴明流水を新の為ふ〻〻神祇祭るゆに
小社ゆ祠ゆ　結海ゆ瀬ゆ
伊勢木屋山天正十年　伊勢国宮川宮我の山　山是長木屋六
拙ゆ入〻　木浅代し初ゆ〻〻ふ天正十年正月二十日　勢州ふ
於〻〻　太神宮正遷宮三百年退轉し〻執行なし　苗
道の上方ゆ影ゆ再興仕度願上ゆ天長祇頼を協久
を所二度改ゆ〻〻言上ゆ　（此門信長江州攻ゆ）　祈願　祈願造
仕ゆ〻〻調ふ御紀ゆ為る　神宮寺千貫久ゆ之八ゆ上ゆ

勧進を以て仕り度しと申上る大臣家入上洛み吉年
八幡宮造営三百貫入下 由有様を得共 果しなく御入
金入下り太神宮遷宮中に千貫ばかり足り申候
民百姓に深役成難苦悩せしめ きんの内乱
自分成いなく御調ら申支る先三ヶ年仕付其外入
用巧実を以て調ると雖 平井久右衛門と申
上ると雖 御取用なき 翌廿六日 業九郎侯と三位中将殿
（英俊 後阿弗） 信長を滅ハ 濃州 岐阜の城主義昭 鳥目二万六千入金定
縄を腐る角 中将殿 奉行 信甘 右の名目繋記恵
正遷宮入用巧実 波 [illegible] 伊勢神宮日記十年
六月二日 木曽川の向 （伊勢国を川 [illegible] 信長 [illegible]） 害
なり 又伊勢 [illegible] 角 [illegible] 深不思議也 [illegible]

家を刈 紀伊国大杉山 遷宮材 [illegible] 伊勢山の木
[illegible] 元禄十六 [illegible] 英濃国恵那山良材 [illegible]
湯 [illegible] 遷宮材出る 享保七 [illegible] 寅年 宝暦
十二 [illegible] 年 右 [illegible] 波国紀ヶ出る
大仏平 天正十四年 秀吉下 [illegible] 洛東大仏殿の材木
木の切杭 [illegible] 八九尺 [illegible] 桶の [illegible] 木杭多
く [illegible]
紀波 [illegible] 木曽川 [illegible] 越前殿宮の [illegible]
別る東方長川 [illegible] 是を [illegible]
炊見 閑 不可波 小山 細見 久田見 福地 中方
蛭川 高山 福岡 坂下 田立 [illegible]殿
右十三ヶ村 [illegible] 町宿 [illegible] 等の [illegible] 名 [illegible]

古道の跡多所あり中仙道と今もいへり　當時七村ありて
人馬の駄自由なり　木曽はたくハ向乃とりふ又川東馬籠峠
より妻籠へ通る乃乃ち中乃とりへり落合宿より乃後
越乃ち孫倉街乃とりふ妻籠より伊奈へ行乃ち清内路
とりふ飯田乃とりふ

野沼渡　犬山　善師野　土田　久利　大鳥　川合
一日市場　土岐神篭　久保原　岩村　上野　御嶽村乃ち伊奈
織田軍記曰天正十年二月十日三位中将殿信長卿
日土田乃陣所　私曰揚と出羽守信助
織田軍記曰天正十年二月十二日三位中将殿信長卿
陣所乃　私曰揚と出羽守信助　十三日高野乃陣所　神篭三郎
揚と業九郎　十八日根羽乃陣所　信長卿　十四日岩村乃陣

蕗原拾葉巻之四十一

信濃　中村元恒編
男　元起　校
原　田富　撰

木曽古道記

日本書紀曰　景行天皇即位五十五年　春二月戊子朔壬辰
以竟挟嶋王孫東山道十五国都督
東山乃名称ハ始メテ　釋日本紀東山の二字ハ　ヤマノミチ
洲ヶ東方の山中に能く行乃ち　東海道乃ち海乃中乃あるを八月和　中仙乃ち移り
神代の跡ハ絶きりしく　神武天皇即位の後和
天下草昧なりしく　日向国宮崎宮ハ　ハ時
封疆未定東征の後始めて中州ハ平治
しかし都ハ大和国畝日山の東南橿原宮ハ定ハ